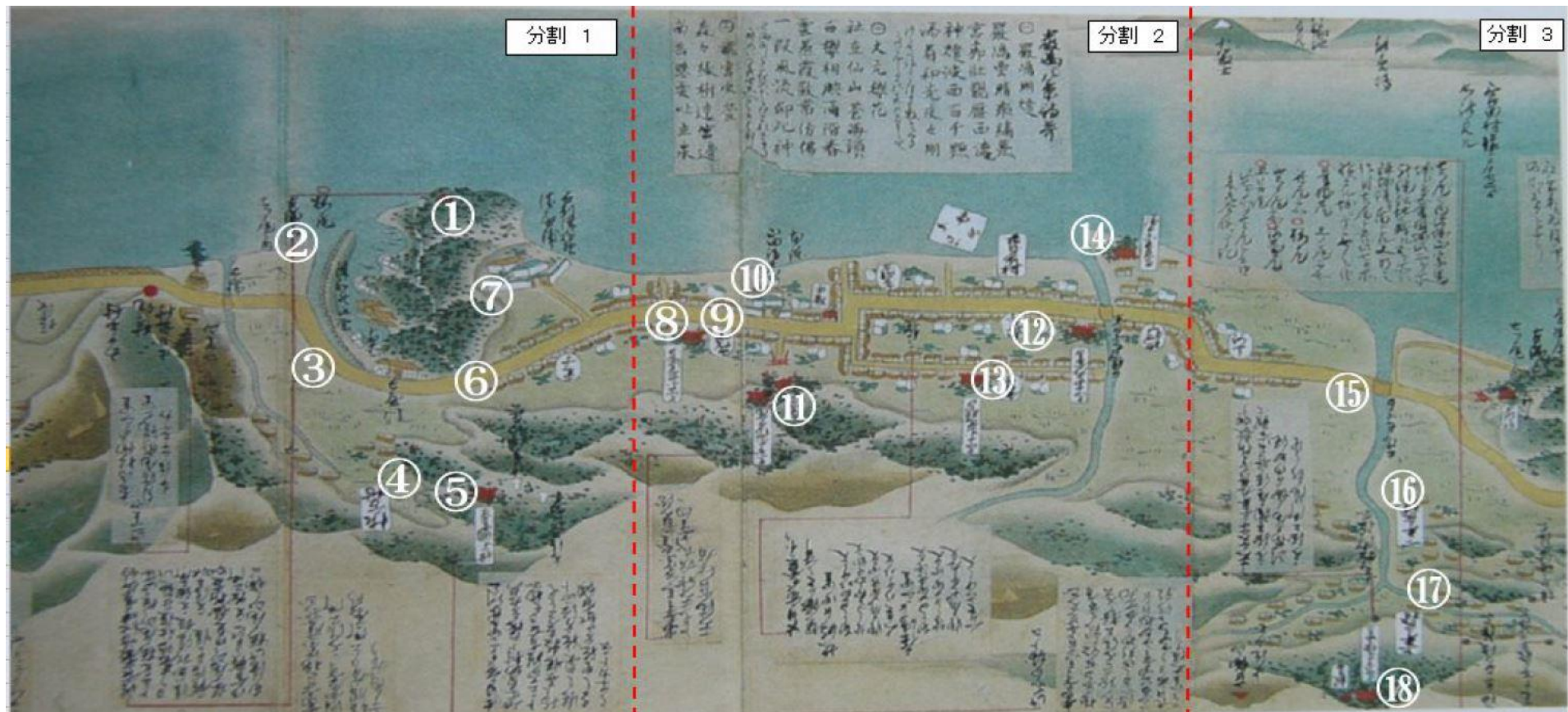


古絵図から読み取る旧山陽道行程記 -廿日市エリア-

寛保二年(1742) 毛利家 絵図方 有馬喜三太作



(参考)「図説 廿日市の歴史」編集・発行 廿日市市 平成9年3月15日発行 行程記(部分) 10頁

図絵 分割 1



①桜尾城址

1の絵図、桜尾城址の部分に注目すると、小高い山しか描かれていない。その訳は、慶長五年(1600)関ヶ原の戦い後、毛利氏が防長へ転封(領地の移し替え)になり、城としての役目を終えた桜尾城は、次第に荒廃していったと考えられ、寛保二年(1742)に有馬が絵図を描くころには、まったく城塞の痕跡が見られなかったので山しか描かなかったということだと思われる。

②街道の入口まで入り江となっており、堤防の石垣が海に突き出ている。

③街道に沿って長屋門、奥に番所、役人小屋、船頭や水主(乗組員)の長屋などからなる津和野藩の御船入の港があり、住吉丸(三三〇石)・吉祥丸(二五〇石)・御紙船ほか二三隻が兵庫県室津までの海路のため、係留されていた。船屋敷の船は参勤交代のほか、津和野藩特産の虫がつかないと評判の楮の和紙が津和野街道を通過して廿日市に運ばれ、船屋敷の御紙蔵に入れられ、大坂方面に売り捌くため使用された。(当時は大阪とは書かない)。

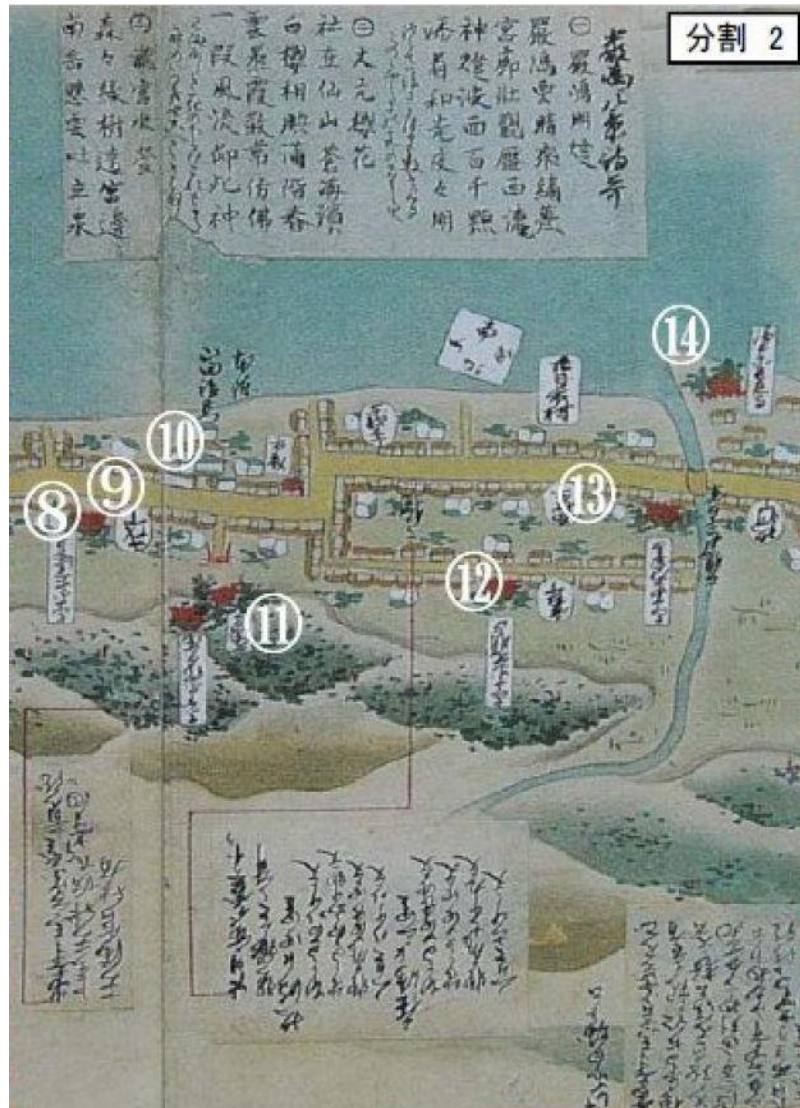
④禅宗 洞雲寺は長享元年(1487年)、今から520年前、厳島神社神主藤原教親が、当時、西の京といわれて文化の中心であった周防の龍文寺の金岡用兼禅師を招き開山した神主家の菩提寺。

⑤白い塔二基 左 中藤掃部墓、右 元清公御廟所。

⑥東ノ丁 東町から人家が続く。

⑦桜尾城址の西麓に石州津和野借屋舗

元和六年(1620)、広島藩との合意のもとに東西五十間、南北三六間の「船着ノ蔵屋敷」が設けられたが、宿泊施設は整っておらず、廿日市の島屋七右衛門方を定宿としていた。しかし不便なために寛永八年(1631)ころに船屋敷として整備された。屋敷内には、御殿、船蔵、土蔵、御紙蔵、定詰長屋(一定の場所に勤務するために生活する長屋)などの施設が建てられ、元文元年(1736)ころには、九十三人の家中が居住していた。



⑧真宗 正連寺

慶長二年(1597)のころ、僧安西四十余歳のとき当地に来て建立したという。

⑨戎町

⑩本陣 山田治右エ門

周防前司藤原親実が神主職(承久三年(1221年)になったとき、山田氏も鋳物師(いもじ・鉄を材料とするいろいろな物を作る鋳工)として鎌倉から巖島神社造営のため、廿日市にやって来たとされる。天文十年(1541)友田興藤が最後の神主家として滅亡すると、当地は大内・陶・毛利氏による支配が変転し、商人・職人にも盛衰があった。山田氏は巖島神主家の時代「中丸・新里・糸賀」といわれた神領衆であった糸賀氏(宗高尾城主、神主家滅亡後毛利方)と平次郎を養子とした関係を持ち、鋳物師だけではなく、庄屋、本陣役をも兼ねた有力者となった。

⑪正覚院・天満宮

⑫裏町 のち後小路(うしろしょうじ) 真宗 光明寺

天文十五年(1546)鎮光坊円尊開基。円尊は毛利元清家臣 渡辺与右衛門慰清正。大永三年(1523)四月十一日友田興藤挙兵時、水晶城の杉甲斐守は、この狭い後小路(光明寺前の通り)にて武田方に討たれた。

⑬御制札

東材木町の北側の建物の中にある。「廿日市上り下り 駕籠定め の事 玖波江四里本馬百八十文 半馬百五十二文 軽尻百廿四文 人足六十文 広島江三里 本馬百廿四文 半馬百四文 軽尻七十九文 人足六十文」と書かれており、廿日市が宿場町であることがわかる。

⑭浄土宗 長恩寺

永禄九年(1566)龍天上人開基。現在の潮音寺。当時は海岸の際の潮の音のする場所に建つ。

図絵 分割3



⑮土橋長四間（どばしちょうしけん）

可愛から串戸の間は街道より海が開けて見えていた。

小富士が見える。伊予(四国)も見えたのか。

⑯下平良村

⑰上平良村

⑱真言宗 極楽寺

天平九年(737)行基山頂の杉霊木で千手観世音を刻みのち弘法大師開眼供養。